

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第13号

平成27年6月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

朱舜水が”拙者の知己”と呼んだ安東省菴

自分の俸禄の半分を差し出し、支えた師弟関係

明治45年6月、朱舜水記念会発行の「朱舜水」(神田印刷所)に、徳川頼倫の「湊川碑と朱舜水」や稲葉君山の「朱舜水の学風と精神」と並んで國府犀東の「朱舜水と安東省菴」が載っている。

國府論文から朱舜水と安東省菴の関係等について紹介する。

安東省菴の負けん気は人一倍

寛永14年(1637)の秋、天草一揆の折のエピソードによれば、当時十六歳であった安東省菴が小瘡を病んでいたが従軍し、一人夜中に突進したが途中で倒れ、後から来た軍がその上を踏みにじって行っても屈せず、起き上がっては進んだとある。

翌年2月、最後の総攻撃の折にもまだ完治していなかったのに突撃しているほどと、その負けん気ぶりを紹介している。

そして、朱舜水が安南と長崎の間を行き来する正保元年(1645)から万治3年(1660)の間、貞応2年(1653)頃、安東省菴が朱舜水のことを知り、その後、二人の間で書面のやり取りが始まった、とある。

だから、朱舜水が長崎に落ち着くことを決め渡ってくると、早速に、書面で安東省菴を招いている。

二人の対面はすぐには実現しなかったが、万治3年(1660)、安東省菴が柳川から長崎に赴き、師弟の約を定めた、とある。

安東省菴は自分の禄高の二百石(実米八十石)の半分を差し出そうとするが、舜水は「それは多すぎる」と受けない。

この時の二人のやり取りが事細かに記されているが、『余計でもない小禄を、半分だけ割いて自分の先生に差し出してしまう。こんな思い切ったやり方というものは、尋常の心がけでできることではない。』と安東省菴を讃えている。

また、寛文3年(1663)、長崎の大火事で朱舜水が焼け出されたときも、「先生が飢え死にでもされようなら、拙者も一緒に。」と、長崎に駆けつけたエピソードも、「舜水の為なら命がけ」と、その非凡さを紹介している。

朱舜水の知己、王翊と省菴の二人

朱舜水は、「知己というは、普通お世辞に使われているが、拙者はめったに人に対して、足下は拙者の知己であると言って許さない。ただ、王翊と省菴だけが、拙者の知己である。」と言っている。

王翊という人は、真に王道を押し立て、明の社稷(≒国家)を盛り返そうとした人で、朱舜水三度目の長崎渡航時、戦い敗れて囚われの身となるが、義を守って屈せず、ついに死に追いやられた人物とある。私は、この文に接し、楠正成、正行の生きざまと重ね合わせてしまった。

王翊の死んだ日が8月15日と伝え聞いた朱舜水は、その後死ぬまで8月15日の夜の月は見ず、王翊のために泣き明かしたとある。

その朱舜水が、安東省菴にあてた書面には、省菴の名を書いた下に『知己』の二文字を書いてあったとある。朱舜水が安東省菴の人物を見抜いて、心を許しておったことが、これで明らかである、と。

◆朱舜水略年譜

人物叢書「朱舜水」石原道博著・吉川弘文館より扇谷転載

朱舜水：「文武全才第一」とその才能をうたわれる傑物。明末亡国の危機に際会して東奔西走、終に日本に亡命して、徳川光圀に招かれ、わが文教、殊に水戸学に偉大な感化を与えた波瀾万丈の生涯。剛毅にして博学、特に経世済民、実用・実学を重んじ、清初五大師の一人に数えられる。

西暦	和暦	年	事暦
1600	慶長5年	1	10月12日、浙江省に生まれる
1638	寛永15年	39	恩貢生として礼部にあげられる
1643	20	44	10月、藍紀同知にあげられたが就かない(第1回)
1644	正保1年	45	5月、南京の副王由崧から徴されたが就かない(第2回)
1645	2	46	正月、福藩から再び徴されたが就かない(第3回) 4月、福藩から三度徴されたが就かない(第4回) 長崎へ赴く(第1次)
1646	3	47	安南へゆき、ついで舟山に帰る
1647	4	48	長崎へ赴き(第2次)、ついで舟山に帰る 昌国県知事を授けられたが受けない(第5回) 10月、監察御史管理屯田事務を授けられるが受けない(第6回) 軍前賛画にも就かない(第7回)
1650	慶安3年	51	正月、藍紀推官に勤められたが受けない(第8回) 兵科給事中・吏科給事中・翰林院官もすべて受けない(第9・10・11回) 孝廉にあげられたが断る(第12回)
1652	貞応1年	53	長崎に赴く(第3次) 安南へゆき、病に苦しむ
1653	2	54	7月、安南から長崎に赴く(第4次) 12月、安南へゆく
1654	3	55	正月、長崎へ赴き(第5次)、また安南へゆく 吐血が始まる 3月、魯王の恩詔が下ったが知らない(第13回)
1657	明暦3年	58	正月、日本船によって魯王の恩詔がもたらされる 2月、いわゆる「安南の役」にあう 魯王に謝恩の奏疏二首をしたためる 8月王翊を祭る
1658	万治1年	59	夏、安南から長崎へ赴く(第6次) 9月、王翊を祭る 10月、長崎から廈門へゆく
1659	2	60	鄭成功から日本請授の依頼を受ける? 冬、長崎に赴き投化する(第7次)
1660	3	61	長崎に流寓する 柳川から来た安東守約(省菴)と会う
1661	寛文1年	62	安東守約が俸禄の半分を割いて奉仕する 6月、「陽九述略」を著す
1662	2	63	安東守約が筑後に居を移すことを提案するが実現せず
1663	3	64	春、長崎の大火で寓居が焼け、一時、皓台寺の軒下に住む
1664	4	65	徳川光圀の使者、小宅生順が長崎に来て、東上を進める 6月、長崎を発つ
1665	5	66	7月、江戸につく 9月、水戸に赴く 12月、江戸にもどる
1667	7	68	8月、水戸へ赴く
1668	8	69	2月、江戸にもどり、駒籠の別荘に入る 徳川光圀の四十の寿を祝う
1669	9	70	11月、七十の誕生を祝い、光圀は養老の礼を行い、後樂園に宴をはり、また倭漢先哲六人を描いた屏風を贈る 「諸侯五廟図説」をつくる
1670	10	71	「学宮図説」をつくる
1671	11	72	王儀(民則)を江戸へ招く?
1672	12	73	「釈奠儀注」を著し、儒学生にその礼を習わせる
1674	延宝2年	75	明室の衣冠を作る
1677	5	78	「諸孫男に与うる書」をしたためる
1678	6	79	安東守約の父の喪をいたみ書をおくる
1679	7	80	11月、八十の誕生を祝い、光圀は養老の礼をおこない、諸品をおくる 天地に拝告し、明室が光復できないのを悲しむ
1680	8	81	老衰の上、疱瘡ができ、病床から起き上がる事さえできない
1681	天和1年	82	病状がますます悪化するが、命を知って医薬を退ける
1682	2	83	3月、宴をもうけ、親友・門人らを招いて永訣する 4月17日、語言声色、平日と変わらず永眠する 常陸太田の瑞竜山に葬られる

(文責「四條啜楠正行の会」代表 扇谷昭)